



ボウリング歴は3年未満。「この歳で新しいことを始めて、上達する喜びを味わえるなんて思ってもみませんでした」

前号既報のとおり、今年3月に国内の全738センターを回ってプレーする「日本一周ボウリングの旅」を完遂した埼玉県在住のアマチュアボウラー・備藤達也さん。ボウリング歴わずか3年の還暦ボウラーが、前代未聞の挑戦を決意した理由や旅先での思い出などを、熱く語ってもらった。本稿はその「序章」。

★

私は大阪の生まれですが、就職したのが全国に営業所がある会社で、22歳の入社時から退

職するまで、ずっと埼玉勤務でした。家内と知り合って結婚したのも埼玉ですが、家内は8年前の7月、私が53歳のときに病気で他界して、それからはずっと一人息子と2人で暮らしていました。

ボウリングを始めたのは2016年の9月、たまたま新聞のチラシ広告で見つけたアオキグランドボールの“健康ボウリング教室”に参加したのがきっかけです。昔からの友人はみんな大阪にいて、こっちで付き合いがあるのは会社の人間か家族

しかいなかったのですが、その教室に行きだして楽しい仲間ができました。

ボウリングは10代、20代のころに何回かやったことがある程度で、教室に通い始めのころはアベレージ110くらいでしたが、プロやスタッフさんから教わったことを繰り返し練習していくうちに、いつの間にか上達してスコアもアップしていきました。この歳で新しいことを始めて、上達する喜びを味わえるなんて思ってもみませんでした(笑)。

で、1年くらいしてアベレージが170台まで上がったときに「180台までいったら仕事を辞めて、全国のボウリング場を回ってみたい」という思いがチラッと浮かんだんです。そんな折に、息子が結婚して家を出ていった。近所には住んでいるんですが、自分は独りになったわけだし、家内の七回忌も終えて、今後の人生をどうするか…と考えているうちに、全国のボウリング場を巡る夢が現実味を増していったんです。

60歳の定年まで半年を切ったころから資料作りを始めて、すべてのボウリング場を回ったら時間は約1年、費用は800万円くらいかかるだろうと計算しました。それを息子に話したら「お父さん、退職金使っちゃうの!？」と驚かれましたが(苦笑)。うちの会社には「持ち株会」というのがあって、入社して20年近くは毎月天引きで株を持たされていました。幸い業績は順調で、投資した資金が5~6倍になっていたので、退職金には手を付けずに済むだろう、と。

費用の見通しが立ったら、すぐに始めたいと思うようになりました。雇用延長して5年後、65歳で始めるとしても、そのときに今と同じ強い思いが残っているかどうか分からないし、移動中に事故に遭うリスクも高

くなりますから。息子も了解してくれたので、それから急ピッチで資料を仕上げ、去年の6月17日、60歳の誕生日に定年退職しました。

手作りの資料は、最初にインターネットで全国のボウリング場を検索したら、あまり役に立たない古いデータしか見つからなかったの、改めて都道府県ごとに調べ直して、かなり正確なものになりました。

じつは去年の1月から、休みの日を利用してボウリング場を回り始めて、埼玉と東京は退職前に全部制覇していました(笑)。旅は7月に北海道からスタートして、最初に行ったのは苫小牧のボウリング場でした。

そこで「私は全国のボウリング場をすべて回ろうとしている者です」とスタッフさんにあいさつして資料を見ていただいたら、「この中で3件、今年に入って閉業していますよ」と(苦笑)。資料を作って旅に出るまでに半年のタイムラグがあるので、残念ながらその間に閉業してしまったところもかなりあることを思い知らされました。

(つづく)

※本稿のつづきは本紙連動Webサイト「b-jweb」に5月15日以降、随時アップいたします。



転球 Time Trip

25年前に

1994年5月15日

「キリンカップ」第10回大会で酒井武雄プロが通算25勝目のV

施設の老朽化を理由に閉鎖が決まり、今年3月31日をもって足かけ48年にわたる長い歴史の幕を閉じた博多スターレーン。西日本最大級のボウリングセンターとして数多くのビッグトーナメントが開催されてきたが、一番の名物トーナメントといえば、男子プロアマによる「キリンカップオープン」だろう。

1985年(昭和60年)に「ハイネケンパワーズ」の名称でスタートした同大会は、今から25年前の94年(平成6年)に第10回の記念大会を迎えた。前年覇者の西城正明プロ(8期=引退)が自ら描いた自画像が大会ポスターに採用され、ギャラリーの話題を集めたが、優勝を飾ったのは1年後輩の酒井武雄プロ(9期)だった。

予選10G目でパーフェクトゲームを達成した酒井プロは、準決勝10位から決勝ラウンドロビンで大まくりを決めてトップシードを獲得。優勝決定戦で

も節目の10勝目がかかった山崎行夫プロ(11期)を233:186のスコアで圧倒し、自身が通算25勝の節目に到達した。

この日の会場には、当時プロ入り3年目の娘・美佳(25期)が応援観戦に訪れており、試合後には涙顔で父に駆け寄って祝福。父娘で記念写真に納まった酒井プロの照れくさそうな表情が印象的だった。



▲喜びの父娘ツーショット



17年間に感謝...

突然ですが…私のコラムが今回をもって終了ということになりました。

読者の皆様には、17年お付き合いいただき本当にありがとうございました。つたない文面ながら、皆様にボウリングの楽しさや厳しさ…それに奥深さをお伝えしてきたつもりです。どこまで上手に伝えられたかは、何とも微妙なところですが…。

思えば、今世紀になったばかりの2001年に、ボウリングジャーナルの津田浩様に声をかけていただき、新堀プロの思いを全国紙に載せてみないか?といわれたことがきっかけでした。そのときは、1年程度のコラムの連載をいただいたという認識で、12コンテンツをイメー

ジして何を書こうか…と思って始まりました。それが、思いもよらず17年もの長期間、毎月執筆することになったのです。ある人は「ボウリング業界で17年も毎月コラムを書いた人なんて他にいないんじゃない?ギネスものだね!」って、笑ってねぎらってくれました(笑)

私のなかでは、なるべく分かりやすいように、ジュニアボウラーでも理解できる内容と文面を意識して17年書いてきたつもりです。技術的な解説であったり、精神的なお話であったり、制度の話題、用具の重要性など、多岐にわたりそのときどきの私の想いをつづてきました。2002年2月号(No.233)に最初のコラムを書かせていた

だいてから、今年2019年5月号(No.439)まで203コンテンツとなりました。私自身、毎月締め切りにも遅れることなくよく頑張ってきたなあと思ったりもします(笑)

ボウリング業界も他のスポーツ同様に、進化し続けています。17年前は、トッププロたちが肘を曲げたり、手首をグースネックでリリースしたりなど、思いもみませんでした。なおさら公式試合で、両手でボールを投げるなど、考えすらしませんでした。環境の変化や道具の進化にともなっていることですが、つくづくボウリングという競技が、17年の間に変わってしまったとも思います。

最後に、私のコラムを愛読していただいたボウラーの皆さんと、自由に書かせていただいたジャーナル紙関係の皆さんに、熱く御礼申し上げます。『自信の上には自惚れがある。謙虚の下には卑屈がある』これを私のモットーとして、熱すぎず…冷めすぎず…毎月1000文字書かせていただきました。

皆さんのボウリングライフが素晴らしい未来になりますように、お祈りいたします。これからもボウリングを愛し続けましょう!

長い間、本当にありがとうございました(^_^)